

第 46 回日本分子生物学会年会 (MBSJ2023) 開催報告

2023 年年会最後のご挨拶

「巨大な雑談室へようこそ」をキャッチフレーズにした第 46 回日本分子生物学会年会はオンラインとオンサイトの 11 月 27 日 -12 月 8 日の開催を無事に終えることができました。参加者数は 6,700 名におよび、シンポジウム、ポスター、フォーラムなどで約 4,500 件の演題が発表されました。ご参加いただき盛り上げてくださった皆様に深く感謝申し上げます。また本年会は 194 社の協賛企業からサポートなくしては実現できませんでした。温かいご支援に御礼申し上げます。

振り返れば当時の杉本亜砂子理事長から打診を受けた 2019 年に構想を始め、2020 年の年年会であった上村匡さんと年会スタッフに同行させていただき、候補地であった神戸の会場を視察しました。運悪く Covid19 の蔓延により 2020 年の年会はオンライン開催となりましたが今回の開催では一部会場にスクリーンを二組設置した横長使用や、通勤ラッシュを避けてシンポジウムを 9 時半開始にするなど、上村さんのアイデアを生かさせていただきました。企画当初はまだ猛威を振っていた Covid19 にどう対応するかが課題でした。幕張年会の結果からもオンサイト参加が熱望されていることがわかっていましたが、生命科学の学会で感染が広がってしまったらシャレにもならないのでオンライン、オンサイトの二本立てで保険をかけることにしました。ハイブリッドの選択肢も検討しましたが講演会場では発表者と聴衆が直接対峙することが良い緊張を生むとの私の考えと、コストの問題を考慮して今回は見送りました。3 箇所に分散する 18 のシンポジウム会場を移動してお望みの講演を聴くことは大変だったと思いますが、一期一会の出会いを得ることも学会の楽しみだと思います。大小様々なサイズの会場がいずれも熱気あふれる聴衆と講演で賑わいました。会場によっては満員で廊下に追加したモニターも足りなくなってしまいご迷惑をおかけしました。会場が狭く座れない、とのお叱りを多数頂戴しましたが伏してお詫び申し上げます。

年会本部は 10 本のオンライン企画シンポジウムを立て、ウォーミングアップしていただくこととしました。オーガナイザーにはこれまで近いよう交流がなかったような方々を組み合わせ化学反応が起きるような仕掛けをいたしました。細胞初期化を扱う動物、植物の研究者をお招きした [O-1PS-01] 動植物初期化原理、表現型多形とエピジェネティクスの専門家が対した [O-4PS-01] 表現型可塑性、などがその例です。いかがでしたでしょうか？ポスター発表にも多数の演題登録をいただき、できる限りアピールの機会を増やしたいとの意図で昨年続きショートトーク (サイエンスピッチ) を開催し、11 会場で合計 534 演題のトークを行なっていただきました。会場毎での審査で表彰を行うとともに、特に評価が高かった演題 5 件に EMBO Press と分子生物学会年会から特別賞を贈りました。希望者のポスター発表を EMBO Press の Chief Editor の Bernd Pulverer 博士らが審査する EMBO Poster Clinic では遅い時間まで熱い討論が繰り広げられ、EMBO Press と分子生物学会から 1 件ずつの表彰が行われました。結果については年会ホームページをご覧ください (<https://www.2.aeplan.co.jp/mbsj2023/>)。年会企画の一つとして行われた「サイエンスイラストレーターのお仕事展」では 15 個人、団体に展示と営業を行っていただき、会期を通して賑わいました。MBSJ-EMBO 合同企画ランチョンセミナー「あなたの論文はどこへ行く：論文出版とオープンサイエンスに関する対話」で議論した内容は Genes to Cells に報告しています。オープンアクセスですのでどなたにもご覧いただけます (<https://onlinelibrary.wiley.com/doi/10.1111/gtc.13100>)。

一方で残念なことに、年会においてハラスメントと受け取られる事例が複数報告されました。学会参加者の多くは所属機関の公務出張で参加しており、ハラスメント禁止などの本務先での服務規程が及びます。学会は研究交流の場であるとともに個人や、研究室が相互評価を行う場でもあり、品位を欠く振る舞いは、本人のみならず所属機関と研究室の評判を下げることもつながりかねません。自由闊達なサイエンスの議論を妨げることをないように参加者の皆様、特に指導者の方々にはいま一度ご注意をお願いいたします。

今回の分子生物学会でも高校生の発表をオンラインとオンサイトで行いました。深い考察がなされる研究も多く、発表のポスター会場は大会で最も密で熱い空間でした。英語で行われたランチョンセミナーでは真っ先に立ち上がってコメントする生徒もいて、サイエンス新人類の誕生を予感しました。私自身会場を歩き回って各所で討論しましたが、学ぶことが多く有意義な議論ができました。最近になって日本の科学研究の退潮を示す数字が報道され悲観的な見方が出ています。現状に安住せず危機感で戒めることは大切ですが、一方で若い人が集う学会では科学の可能性の広がりや明るい未来への展望を見せることが何よりも大事です。そのような役割を今回の年会で果たせたとしたらうれしいことです。

2024 年 2 月

第 46 回日本分子生物学会年会

年会長 林 茂生

(理化学研究所・生命機能科学研究センター)